

2025年度研究分科会 研究成果発表 プログラム

13:20~	受付 (2階ロビー)		
13:50~14:00	LS研運営部会長 挨拶		
14:00~14:30	<No.7> AI技術の活用によるアプリケーション保守の効率化の研究 (クラス1)	<No.1> Fit to standardアプローチに基づくシステム間の整合性確保の研究	<No.10> 社内向けITサービスデスクへ生成AIを適用する方法の研究
14:40~15:10	<No.11> 将来の環境変化に対応可能なITシステムの運用技術に関する研究	<No.5> RAG活用におけるナレッジマネジメントの在り方の研究(クラス1)	<No.4> 新規ビジネス創出に向けたマルチモーダルAI活用の可能性の研究
15:20~15:50	<No.12> 運用業務におけるAI技術の適用領域と効果的な導入に関する研究	<No.2> ビジネスアジリティ実現に向けたIT部門の在り方に関する研究	<No.3> AI技術を活用したオフィス業務自動化のベストプラクティスの研究
16:00~16:30	<No.6> RAG活用におけるナレッジマネジメントの在り方の研究(クラス2)	<No.9> AI技術を活用したサイバーセキュリティ対策の研究	<No.8> AI技術の活用によるアプリケーション保守の効率化の研究 (クラス2)
16:30~16:45	休 憩		
17:00~18:30	表彰式 (会場:ロイヤルホール 3階) 開場: 16:45 ※研究分科会関係者のみ		

第1会場 (春海)
 第2会場 (有明)
 第3会場 (東雲)

会場のご案内

会場 ロイヤルパークホテル

〒103-8520 東京都中央区日本橋蛸殻町2丁目1番1号
<https://www.rph.co.jp/about/access/>

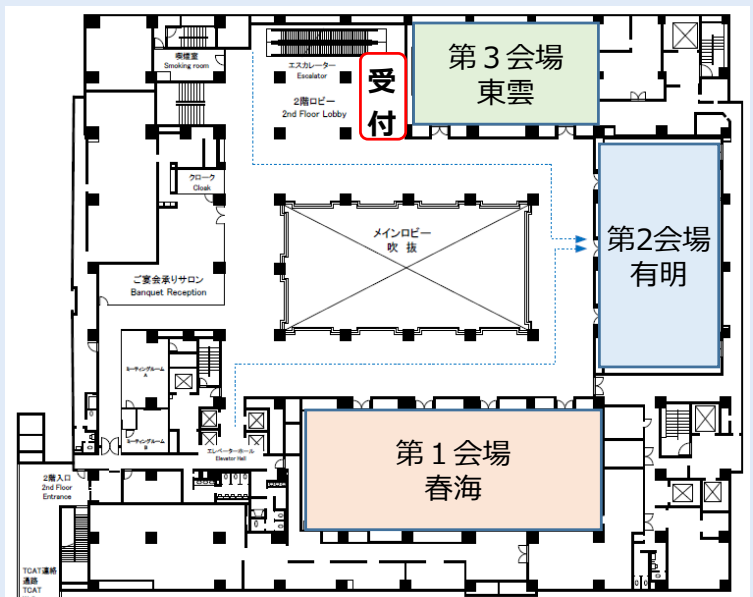
東京メトロ半蔵門線「水天宮前駅」直結

■ 会場レイアウト (2階)



東京メトロ半蔵門線「水天宮前駅」に直結(4番出口)
 東京メトロ日比谷線「人形町駅」より徒歩5分(A2出口)
 都営浅草線「人形町駅」より徒歩8分(A3出口)

※所要時間は目安です。乗り換え、待ち時間は含まれておりません。また運行状況により多少異なります。



お問い合わせ先

Fujitsu ユーザーコミュニティ LS研究委員会 (LS研) 事務局

富士通株式会社 LS研推進部内

Webサイト: <https://www.fj-lsken.com/>

Tel : 050-3459-2669(直通)

E-mail: contact-lsken@cs.jp.fujitsu.com

<No.7> AI技術の活用によるアプリケーション保守の効率化の研究 (クラス1)
～ RAGを活用した属人化排除と不具合対応の迅速化 ～

AI活用でアプリケーション保守の属人化を解消！本研究では、過去の障害履歴・設計情報を用いたRAGと、ソースコードを対象とするロングコンテキストを組合せたハイブリッドなチャットAIアプリによる保守対応を提案。AIアプリは問合せから対処手順・原因候補・修正案を自動提示。AIと人力での対応内容・時間・真因特定率を比較。AIアプリにより非熟練者でも同等の保守対応が可能であることを実証しました。保守対応の効率化に課題を感じている方、必見の研究です。

<No.1> Fit to standardアプローチに基づくシステム間の整合性確保の研究
～ 最適なシステム依存度に基づく標準運用要領の検討 ～

Fit to Standardアプローチに伴う複数システム導入は、データ不整合など様々な課題を招きます。本研究ではシステム運用を対象とし、システム間整合性を高めるといくつかの運用観点に不都合となる点が存在する事に着目しました。「最適なシステム依存度」を導出し、分科会に参加している各社の実態調査で判明した障壁に対して解消案を提示することで、全体最適を考慮した標準運用要領の実務への適用可能性を立証した研究成果となります。

<No.10> 社内向けITサービスデスクへ生成AIを適用する方法の研究

本研究は、生成AIの回答品質を左右する要因を「ナレッジ構造」と「暗黙知のデジタイゼーション」という実務の核心から徹底的に検証し、精度向上の具体策を初めて体系化した点に大きな独創性がある。特にPowerPoint形式が最も高精度となる要因を処理構造から実証し、さらにFAQ化により暗黙知を高い再現性で形式知化できることを明確に示した。本成果は企業が直ちに適用できる導入設計指針として極めて有用である。

<No.11> 将来の環境変化に対応可能なITシステムの運用技術に関する研究
～ AIによる運用自動化に備えた作業手順書チェック手法の提案 ～

その手順書、AIに渡して大丈夫ですか？ AIは誤った手順書にしたがい『忠実に』システムを破壊します。本研究では、生成AIに手順書の不備を自動検出させる仕組みを提案し、ガイドラインとして体系化しました。Copilot・Gemini・Claudeの3ツールの性能比較、異なる運用現場3社での実証実験、9社100名のアンケートにより多角的に実効性を検証しています。AIEージェントによる運用自動化への準備運動、ここから始めませんか。

<No.5> RAG活用におけるナレッジマネジメントの在り方の研究(クラス1)

本論文は、RAG技術を活用した継続的なナレッジマネジメントを実現するための実践的な知見を提供する。従来のナレッジマネジメントにRAG技術の特性を補完することを目的として、技術面ではドキュメント構造やRAGパイプライン要素がLLMの回答精度に与える影響を分析し、運用面では長期的に精度を維持する仕組みを体系的に整理した。これらを統合し、組織へのナレッジマネジメントの定着を支援するためのガイドラインを研究成果として提供する。

<No.4> 新規ビジネス創出に向けたマルチモーダルAI活用の可能性の研究
～ 生成AIによるアイデア生成・評価の自動化フレームワーク構築と
AI・人間評価の整合性に関する予備的実証～

マルチモーダルAIは「組み合わせ」から価値を生むAIです。しかし、その活かし方は多くの現場で試行錯誤が続いています。本研究は、画像・音声・センサーなどのモダリティの組み合わせを起点に、新規事業の発想から評価までを一気通貫で進めるフレームワークを提案します。生成AIを使った大量アイデア創出と短時間かつ多角的な評価により、有望案の選出を効率化。マルチモーダルAIを活かした新規事業を属人化させず前に進めたい方、必見の研究成果です！

14:00

～14:30

14:40

～15:10

**<No.12> 運用業務におけるAI技術の適用領域と効果的な導入に関する研究
～ AI導入を促進するプロンプトエンジニアリングの確立 ～**

情報システム運用における障害・問い合わせ対応の初動支援を目的に、未整備で分散した社内データ環境でも有効な生成AI活用手法を検証した。役割設定や制約条件、出力形式を明確にしたプロンプト設計により、正解率以上に思考プロセスの安定化と判断のしやすさが向上することを確認。生成AIを「正解を出す道具」ではなく「考えるための支援装置」として活用する実践的アプローチを示す。

**<No.2> ビジネスアジリティ実現に向けたIT部門の在り方に関する研究
～ 変化の時代に対応するIT部門の役割とモデル構築 ～**

「IT部門が変化に追いつけない…！」そんな悩みを抱える企業は多い。本研究はその壁を突破するヒントを探るため、実際にアジリティを発揮している企業を徹底調査！組織体制、ガバナンス、人材・育成の3要素に共通する“強いIT部門の型”を抽出し、実践に使える新モデルとしてまとめました。さらにアンケートで有効性も確認！企業が次の一歩を踏み出すための、リアルで使える知見を提供する研究です。

**<No.3> AI技術を活用したオフィス業務自動化のベストプラクティスの研究
～ 現場で使われるAI導入方法論 ～**

AI導入が試行段階で止まり、現場に定着しない原因はどこにあるのか。本研究では、オフィス業務におけるAI活用を「業務選定・課題解決・評価」の3要素で体系化し、現場で“使われ続ける”AI導入方法論を提案しました。実証実験を通じて、運用設計の違いが利用定着や満足度に大きく影響することを明らかにしています。AI活用に悩む現場担当者・推進者にとって、明日からの取り組みに活かせる実践的知見が得られます。

**<No.6> RAG活用におけるナレッジマネジメントの在り方の研究(クラス2)
～ 人間とAIが協働した暗黙知の表出化及び知識創造サイクルの構築へ向けて ～**

そのRAG、ナレッジは本当に整っていますか？足りないのはわかっているが「何が抜けているか」「どこを直せばよいか」が分からず手が止まりがち。本論文では、AIと人が協働して欠けた知識を補い、RAGで参照しやすくする手法を提案。この流れを実装し、操作マニュアルを対象に検証しました。従来の「人が考えて書く」から、「AIが欠落を見つけ、人が編集し、AIが統合する」へ転換する、AI時代のナレッジマネジメントの在り方を示します。

<No.9> AI技術を活用したサイバーセキュリティ対策の研究

サイバーセキュリティへAIを活用した対策を研究。専門性が求められる最上流工程の「情報セキュリティ規程」策定と「CVSS環境評価基準」判定をAIによる支援・代替を多角的に検証。RAGとマルチエージェントによる「規程作成AI」を開発し、既存規程の改訂機能も加え対策のスピードアップを実現。既存環境にあるリスクを評価する「環境評価基準判定AI」では、CVSS採点を短時間で実施しリスク見える化を実現。AIが上級有識者の業務を支援・代替する際の有効なシステムアーキテクチャを検証した研究です。

**<No.8> AI技術の活用によるアプリケーション保守の効率化の研究(クラス2)
～ コードと仕様書における「AIが読みやすい形式」の実証 ～**

AIの自律的なアプリケーション保守に向けた第一歩！本論文では「AIにとって読みやすい開発資産」を突き詰め、その具体的な条件（明示性・構構性・網羅性・関連性）の効果をご提案いたします。実証実験では不具合修正が有識者同等精度を実現。また、属人化の影響が大きいテスト仕様書作成に関して開発資産の条件からAIの精度向上および大幅な時間短縮が可能です。どの企業においても不具合対応の属人化の解消と保守品質向上に貢献する研究成果です！

15:20

～15:50

16:00

～16:30